

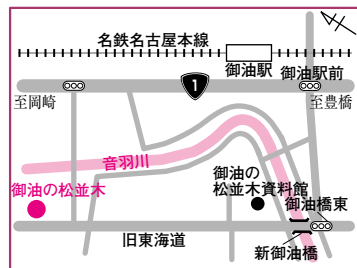


とよかわの

みつけた!



戦時中でも切り倒されなかった御油の松並木



御油宿と赤坂宿の間、約600年にわたる東海道随一の松並木は、慶長9（1604）年、徳川家康の命を受けた奉行大久保長安が植えたと言われています。こうした松並木は、街道に風情を添えるとともに、夏は暑さをしのぐ木陰をつくり、冬は冷たい北風や雪を少しでも和らげ、旅する人の心を慰めたことでしょう。しかし、松並木に対する幕府の監視の目は厳しく、街道沿いの村々には、「みだりに松の枝葉を切らない。間隔が遠くなったら農事の暇に苗木を植える」などといった通達が出されていたそうです。

たいせつにされた街道の松並木も太平洋戦争中は資源不足のため、木造船の材料などにと切り倒される恐れがありました。しかし御油の松並木が現存しているのは、地域の皆さんが松並木の保存のために、国の天然記念物にと働き掛けを行い、昭和19年11月に指定を受けたからです。そして今なおその思いは地域に引き継がれており、現在も約300本の松が当時の面影をしのばせています。こうした熱意により、松並木が残っていることを知らない方も多いのではないのでしょうか。

